

けんしゅうしましよ

2号

R6. 5. 29

文責 村上

道徳 主題名 正しいことを進んで
中心内容項目 A-1 善悪の判断、自立、自由と責任
資料名 おれたものさし
授業者 岩井 裕

5月22日(水)3校時、2年1組において、特設授業が行われました。提案授業を受けての授業で、研究についての理解を深める機会となりました。

事後研のグループ討議から



1. テーマ発問により、価値について自分事で考える姿がみられたか。

- はじめのテーマ発問とエピソードにより導入がとてもスムーズに進んでいた。
- 導入でのエピソードが、子どもたちが自分ごととして考えるための手立てとなっていた。問い返しによってこどもの本心をひきだし価値に近づけるために効果的だった。
- ロールプレイが場面の確認や登場人物の整理に役立っていた。関連して、登場人物の関係性を視覚的に確認できるような板書があればよかった。そのような工夫があれば、授業後半の登場人物3人の視点を整理しやすかったのではないか。

2. 児童が自ら問いを選択することで、学びの主体意識が高まっていたか。

- 自分たちで考えたいという主体意識が感じられた。ネームプレートで立場を示したこともよかった。
- 自分で問いを選択したことで、意欲的に伝えたい、聞いて欲しいという気持ちを感じられた。
- 児童が考える問いの質については、これからの取り組みが大切。
- 児童からの想定外の問いに対する教師の心構えと布石の大切さを感じた。
- 児童の「考えたい」という気持ちを大切にできる一方で、価値に迫っていく上での難しさを感じた。
- 課題と中心発問の整合性はとれていたのか。子どもの思考が広がりすぎたように感じた。
- 前半のロールプレイまでの流れを工夫し時間配分することによって、中心発問から納得解に至る部分をもう少し深めることができたのではないか。

授業者より

- 時間配分に関して軽重の付け方の整理が必要だった。
- 登場人物の整理がもう少し必要だった。(模擬授業より意見がでなかったことへの戸惑いがあった。)
- 布石の大切さを感じる。「ものさしをのぼるにわたしたぼくの姿」に着目させ進めたが、想定とは少し違った。問いの質や数については吟味が必要。ゴールに向かうための教師の導き方が大切になる。

助言者より

田隈指導主事

- 挑戦の大切さと伴走者としての姿勢が、子どもが学びを選択する姿につながっていた。
「問いをもつ！」多角的に考える切り口と資料を通した問いが大切。
- 問いを考えるときの出口は、課題にたちかえること。
「よいことをしたい気持ちをパワーアップさせるには？」という問いかけもできる。

石山指導主事

- 導入の工夫がよかった。(少年時代のエピソード)
- テーマ発問 ロールプレイによる児童へのおとしこみが、「～の立場」につながる
- 中心発問の選択は今日の(授業の中心)であり、児童が自分で考え主体的に学んでいく姿は非常に画期的だった。
- 一人の児童に注目して見ていたが、納得解を導き出すときの「(何かを壊すのは)自分のものでもだめだよ」という言葉が印象的だった。
- 誰と交流するか選択する場面で、岩井先生に行く子もいたことがよかった。
- 指導要領 「多角的・多面的に考える」の一文から「価値理解 人間理解 他者理解」の視点で道徳の授業を見るようにしている。
- グループ討議で「中心発問を児童に考えさせる中で、内容項目とのずれをどうするか」というような論議があったが「高学年への準備期間と考えること」で、今後も継続して深めてほしい。ロイロノートでの交流にもつながると考えられる。

新井研究所長

- 道徳の授業が本年度の経営の重点(ウェルビーイング)に関わっていた。児童の満足感があった。
- 今後へ向けて、児童全員が幸福感を持てたのかも考えてほしい。授業によっては、一問一答が多くなりがちで当たらないと発言できないことも多い。よりたくさんの子どもが意見を言う場の工夫、アウトプットの機会の工夫をしていくことが大切。• 児童全員が自分の問いを持てたかと考えるとき、ICTを活用することで「友達の問いを見ることで意見が持てる」、「交流相手を見つける際の手立てになる」という良さがある。



■今後の予定■

- 6月24日(月)【道徳】政野先生、【特支】大島先生 指導案検討 ⇒ 部会研
- 7月 1日(月)佐藤先生指導案検討 (指導主事訪問二次、特設授業) ⇒ 全体研
- 7月 8日(月)【特支】大島先生 事後研 ⇒ 部会研
- GIGA 授業研 事前説明 斉藤先生(全体)
- (7月9日~19日の間に授業日を設定)
- ※ 政野先生の事後研は7月に変更になりました。